

学習指導要領の趣旨の実現に向けて必要となる諸条件について、本検討会で議論したいこと

お茶の水女子大学 富士原紀絵

全般的な関心：ギャップを埋める（①は自身の研究から、②は問題提起のみ）

①学力格差の観点から

保護者（あるいは地域）の経済的・文化的格差を反映した子どもの格差（学力格差）の問題の本質は社会福祉領域の問題であり、教育（学校）が解決できるものではない。ただし、よく知られるように欧米では子どもの格差の是正のために、特定の地域・特定の学校に資（財）源を投入し、格差を埋める実践研究的な施策の取り組みもある。日本では社会歴史的背景も違う欧米の施策をそのまま実施することは難しいものの、子どもの学力形成に保護者の経済的・文化的格差が影響を及ぼしていること、保護者の格差が広がっていることを深刻に受け止めた上で（第二回の広井良典さんの話題提供にもある）、学校教育でも格差是正のために出来ることを考える必要はないか。

近年、日本の学力格差研究の蓄積は増えており、「効果的な学校」研究もみられるようになった。

「効果的な学校」では現行の学習指導要領が掲げた内容に積極的に取り組んでいることも明らかになっている（例：令和3年度・お茶の水女子大学の全国学力・学習状況調査と保護者調査を紐付けた分析。効果的な学校では対話的な学びを意識した学習形態、カリキュラム・マネジメント、キャリア教育の工夫等々を意識していた）。

学力格差を埋めるために、現行の学習指導要領の中でも、今後取り組みとして一層強調・重視すべき点、あるいは現在の指導要領の中で不足している点について検討したい。

また、社会の格差の縮小が早期に見込めぬとすれば、そうした社会で生きる上での子どものに必要な「基礎・基本」の「資質・能力」とは何かについて検討したい。

②これからの社会（産業）と学校の観点から

第三回の安宅和人さんの著書の中で、日本の産業構造の変化に対応する初等中等教育の教科についての提案がなされていた。自身が賛同するのは図画工作科（なかでも工作）と技術科、中等教育段階の家庭・技術科（関係するのが高校の美術科、情報科か）についての提言である。これらの教科で学ぶ内容は社会・職業生活の中でも果たす役割は大きく、これまで以上に重要な位置を占めるように教科編成・教科内容（教科の横断性を超えて）何らかの検討を要するのではないか。STEAM教育を実現する教育課程といった議論に相当するのかもしれない。